

アンドレ・ジードの『鎖を離れたプロメテ』 と「無償の行為」について

田 中 宏*

プロメテウスはギリシャ神話によれば、神の国から火を盗み出し人類に与えた神であり、この行為がゼウスの怒りにふれ、プロメテウスはコーカサスの岩山で三千年間縛りつけられ、昼間はハゲタカに内臓をえぐられるという罰を受けた、英雄的神として描かれている。英国の詩人 P. B. シェリー (1792-1822) は『解き放たれたプロミュース』(*Prometheus Unbound*)の中で、ゼウスに日夜苦しみを与えられたにもかかわらず、ゼウスを憎まぬという愛の神としてのプロメテウス像を描いている。私は古今の文学者たちがプロメテウスをどのように描いてきたかに関心を持ち、手始めとして『鎖を離れたプロメテ』(*Le Prométhée mal Enchaîné* 1899)を書いたアンドレ・ジード (André Gide 1869-1951) のプロメテウス像を探り、またこの作品の副テーマである「無償の行為」が『法王庁の抜け穴』(*Les Caves du Vatican*)でどのように取り扱われているかを考えたいと思う。

『鎖を離れたプロメテ』に現れる登場人物は、ズース (ゼウスを思わせる人物)、プロメテウス、コクレス、ダモクレス、カフェのボーイである。舞台はパリで人物はカフェのボーイ以外は、いずれもギリシャ・ローマの伝説上の人物の名前をつけられている。例えばコクレス (Horatius Cocles) はエトルリ

* 人文学部教授 — 英文学

ア王ボルセーナ (Porsenna) が、ローマを攻めたとき、他の二人と共にスブリキウス橋 (Pont Sublicius) を守り、敵を防いで川を泳ぎ渡って帰るが、この時に片目を失ったと言われている。ダモクレスはシラクサの専制君主に仕えて、帝王の身分を羨んだので、王は一日だけその地位を彼に譲ることにする。ある宴会の席上で、ダモクレスがふと顔を上げると、一本の剣が頭上に馬の毛で吊り下げられているのを見て、肝を冷やしたという話が伝わっている。その後迫り来る危険のことを「ダモクレスの剣」といわれるようになった。ズースつまりゼウスは町の銀行家として登場する。

さて語り手としてのカフェのボーイによると、ズースと名乗る銀行家が500フランの紙幣を入れた封筒を持って町へ出かける。そして路上にわざとハンカチを落とす。たまたまそこを通りかかった一人の男（コクレス）がそのハンカチを拾って、近くにいた落とし主にハンカチを渡す。その落とし主は「失礼ですが、どなたかお知り合いの方がおられますか」と聞く。人の良いコクレスは言われるがままに、渡された封筒に名前を書く。ところがその落とし主は、突然平手打ちをコクレスの横っ面に食らわせ、自分は馬車を呼び停め姿を消してしまう。この銀行家のズース、つまりゼウスの行為が「無償の行為」とこの作品で言われている。このことについてカフェのボーイは次のように説明を加えている。

私には一人の友達がいて、あなたはお信じにならないでしょうが、金持ちです。その上彼は頭のいい男です。彼は無償の行為がどのようにできるのだろうかと考えました。これはいかなる結果も生まない行為と考えてはいけないと言うことをご理解頂きたいのです。いやとにかく、無償の、なんらの動機もない行為のことです。お分かりですか。利害を離れた、自発的な行為。また目的もない、何者にも支配されない行為。自由な行為。純粋な自らの行為なのです。⁽¹⁾

フランス語で *action gratuite* といわれる行為を、多くの訳者たちは「無償の行為」と言う訳をつけている。しかしジード自身カフェのボーイに語らせ

ているように、この行為は何の動機にも、感情にも左右されない、利害関係もない行為と説明されているので、「無償の行為」という日本語は不十分ではないかと私には思われる。と言うのは私たちが「無償の行為」と言うとき、「無報酬の行為」を意味するので、この「無償の行為」という訳はここに説明されるような多くの内容を包みきれないと考えるからである。

さてコクレスはせっかくハンカチを落とし主に拾ってあげたのに、そのお返しに平手打ちを受け、またその封筒に書かれた男は、ある日突然、理由もなく500フランを未知の人から受け取ることになる。その男がタモクレスである。コクレスとタモクレスがある日、偶然カフェで出会ったとき、コーカサスの岩山から鎖を脱してやって来たプロメテウスがやって来る。二人がプロメテウスに「あなたの特徴はなんですか」と尋ねると、プロメテウスは「私はワシを持っています」と答えワシを呼ぶと、三人の座っているカフェのガラス戸を粉碎して一羽のワシが現れ、その翼でコクレスの片方の目をえぐり取る。そしてワシは鋭い叫び声を挙げ、プロメテウスに飛びかかる。プロメテウスがチョッキのボタンをはずし、自分の肝の一片をワシに与えると、カフェは大騒ぎになる。この時、一人の客がプロメテウスにこんなことを告げる。

「ねえ君、だけどこのワシのお陰で君が何か特別のものだなぞと考えちゃいけないよ。ワシなんて、結局うち明けて言うとな僕たちみな持っているんだよ。」

「しかし、パリではそれを連れて歩かないよ。」と他のものが言葉を続けた。

「パリじゃちょっと具合が悪いからな。ワシなんて困るよ。まあそいつが今やったことを見たまえ。君がワシに肝を食べさせるのが楽しみなら、それは君のご自由さ。だけど断言するけど、それを見ているものにとっては全く辛いんだよ。」⁽²⁾

ワシに自分の肝を食べさせる行為は一体何を意味するのだろうか。ジードの『鎖を離れたプロメテ』を訳した河上徹太郎はこの箇所を彼の著書『西洋

暮色』の中で次のように説明している。

プロメテウスは自分の個性って言うものを火を創ることに発見する。火を創ったお陰でワシが自分の肝をついばむ。そこで肝をついばまれる痛さってものが、自分の個性の表現になって来るんですね。そうなるとプロメテウスは自分のワシがたいへんかわゆくなって来るんです。なぜならワシは自分の個性を発揮してくれるものだからなんです。ところが個性を発揮されてみると、パリのカフェで、自分のチョッキの胸をあけて、ワシに肝をついばませるという不作法な身勝手に、まわりの市民どもはひんしゆくするんです。これがジードの皮肉なんでありまして、個性を尊重するために自分を非常に大事にし、自分は自分の個性を美しいと思っているけれども、しかし、世間じゃ他人の個性なんてなんとも思っていない。むしろ醜いと思っている。そういう皮肉があるんです。⁽³⁾

この物語でプロメテウスは聴衆に次のように演説をする。

諸君、私は人間のために多くのことをしました。……何故なら以前には彼らは一体何者だったのでしょうか。彼らは存在していました。しかし存在の意識を持っていませんでした。ちょうど彼らを啓蒙するために火を作ってやったように、私は彼らに対する愛のために、彼らに存在の意識も作ってやったのです。彼らが最初に持った意識は自分たちの美しさについてでした。

自分では気が付かずに私の中にワシの卵ができていました。……

それに私は自分の姿に象って人間を作ったものですから、今分かったのですがおのおの人間の中に、孵化しないあるものがあるって、それが期待を持っていたのです。つまりめいめいの人間がワシの卵を持っていたのです。

私の覚えていますことは、彼らに存在の意識を与えるだけでは満足で

きず、同時に存在の理由も与えようと望んだのです。私は彼らに火と、炎と、その他炎が原動力となる技術を与えました。そして彼らの精神を活気づけて、その中で進歩に対する飽くなき信念を花開かせました。

そして私は人間の健康が進歩を生むことに費やされるのを見て、不思議な歓喜を覚えたのでした。これは善に対する信仰ではなくて、もっとよりよきものに対する病的な希望なのです。進歩に対する信仰、それが人間たちのワシだったのです。諸君、われわれのワシがわれわれの存在理由なのです。⁽⁴⁾

プロメテウスはワシをまるで自分の恋人か、子供のように愛し、自分の肝を与え、彼自身はやせて行く。このワシへの献身の行為をジードは論点先取(petition de principe)という言葉を使って、次のように説明している。論点先取とは論理学の言葉で、「論証を要するものをすでに論証されたものとして、前提の中に加えるところから生じる虚偽」を意味する。

諸君、われわれはいくらやっても無駄です。われわれは論点先取から逃れることはできません。では論点先取とは何か。諸君、私はあえて申します。すべて論点先取とは気質の肯定です。……

私が人はワシを持たねばならないと宣言するとき、あなた方は何故だと大声で叫ぶことができます。ところでそれに私が何と返事をして、私の答えは、私の気質が明確にしている次の方式、つまり、私は人間を愛さない、私の愛するものは人間をむさぼり食うものであるという言葉以外には帰着し得ないのであります。……

ところで人間を食うものは何であるか？それは彼のワシであります。従って諸君はワシを持たねばなりません。⁽⁵⁾

プロメテウスの「私は人間を愛さない、私の愛するものは人間をむさぼり食うもの——つまりワシである」という言葉は分かりにくい表現であるが、河上徹太郎は次のように説明している。

プロメテウスは神々に反逆したお陰で、人間性を回復する。回復して何が欲しいかというと、個性が欲しいのです。人間性一般はもういらない。……自分の個性は何だろうか。自分の個性は神の火を盗んだこの行為にあるっていう風に考えつくんですね。そうするとワシが来て自分の肝をついばむその痛い事実は何か、これは自分の個性の確立じゃないか。⁽⁶⁾

この河上徹太郎の解釈は、またジードのプロメテウスの神話の解釈でもあると考えられる。つまりプロメテウスが火を盗むことによって人間を人間らしくした。人間らしいとは何であるか。それは個性の確立ではないのかと。言い換えればワシに食われる人間は個性を培う人間、あるいは進歩を願う人間の象徴的姿であると考えられる。

さてこの物語に話を戻すと、ワシがカフェの窓ガラスを叩き割り、コクレスの眼球をえぐり取ったとき、ダモクレスはカフェのボーイに勘定を請求して、窓ガラスの破損代とコクレスの眼球代とを合わせて、483.5フランを支払って立ち去る。

その後、コクレスとダモクレスがどうなったかと言えば、カフェのボーイによれば、ワシに片目をえぐられたコクレスのかえってよく見えるようになり、また新聞に書き立てられて義捐金が集まり、それを資金にして目の不自由な人のための養育院を建て、彼自らその院長になる。そしてさらに町中を徘徊してほほをなぐられ、新たなダモクレスに金が届くことを考えたりする。他方ダモクレスは、一体誰が彼に500フランをくれたかが解決できず、思い悩んでいる。そして夜目が覚めては、「主よ、私は誰に借りているのでしょうか。私は何も知らないうちに負債を背負っています」と嘆く。彼を苦しめているのは、たとえば彼がコクレスの眼球代を支払っても、その金は彼のものではなかったからである。ダモクレスの苦しみは他人（コクレス）の苦痛によって富を得たと言うところから来る。ダモクレスの苦しみを見かねてプロメテウスが銀行家ズースのところへ行く。

「御願いですから、ダモクレスに会ってやってくれませんか。500フランを渡したのはあなただということを知らせるだけでいいのです。あの不幸な男は苦しんで死んでゆくのです。あなたはあの男を殺すことは理解できます。それがあなたの楽しみなのですからね。しかし彼に少なくとも誰に殺されるかということを知らせてやりたいのです。彼の気持ちが休まるように。」⁽⁷⁾

しかしズースは答える。「私は自分の威力を失いたくない」こうしてダモクレスは死ぬ。ダモクレスの死は何を意味するのだろうか。中村栄子氏は次のように解説している。

ジードはゼウスの恣意的な行為が生真面目な人間を死に追いつめたという笑劇によって、キリスト教の説く摂理や恩寵のばかばかしさを描いて見せたわけである。⁽⁸⁾

しばらくして、コクレスがプロメテウスに出会ったとき、彼に聞く。

C：「じゃ、本当ですか。あなたがワシを殺したのは。」

P：「おまけにそいつを食べるんですよ。信じないのですか。……あいつがいたとき、私に笑うことなどできましたっけ。そして私はひどくやせていませんでしたか。

彼は随分長い間、私を食っていました。今度は私の番だと思ったのです。」

C：「では生前のワシの美しさについて、何が残っているのですか。」

P：「羽根がそっくりとってあります。」⁽⁹⁾

プロメテウスがワシを食ってしまうという行為をどのように考えればいいのか。河上徹太郎は次のように述べている。

ジードは自然主義に反逆して機械的人間から脱出して、個性ってものを発見してみると、その個性っていうものは実は、他人にとってはちっとも美しくはないものであったと言うことを、身にしみて感じる。それがこの茶番劇のオチなんですね。彼は最後に自分のワシっていうものが、自分の個性であることを感じる。個性っていうことはジードはひとつも書いていませんが、われわれの言葉でいうと、自意識っていうものです。自意識の美しさっていうものを表現しようと思ったところが、自意識っていうものは誰も認めてくれない。自分だけが可愛がっている内密の親しさであることを発見する。そこで彼はついにワシを殺して、そのワシの肉をコクレスその他に食わして、そのワシの羽根一本とって、その羽根でもってこの小説を書いたというのが、『鎖を離れたプロメテ』の結びなんです。⁽⁹⁰⁾

この物語でワシを食った後のプロメテウスが次のように描かれている。

しかも人々は彼が口を開くより前に、これがプロメテだと思えないくらいに変わっているのに驚いた。彼は太って、元気になっていた。そしてほとんど態度が不謹慎だと言ってもいいくらいに、にこにこしていた。⁽⁹¹⁾

このプロメテウスがワシを食べた後の変化を考えると次のような解釈が考えられる。中村栄子氏は、この物語は「精神の自由の神話であると同時に、作家の自由の神話でもあった」⁽⁹²⁾と述べているが、何からの自由だったのだろうか。新庄嘉章氏は次のように述べている。

プロメテウスは最後に最愛のワシを殺してその肉を食べる。これはジードが過去の清教徒的な克己主義を清算して、解放された生命の狂熱的な礼賛者になったことを暗示している。この時期のジードは自分自身も言っているとおり、「ワシに肝をついばませなくても生きていけることを知って驚いたプロメテウスであった」⁽⁹³⁾

引用(11)の描写は新庄嘉章氏の指摘されるように、プロメテウスが自由を満喫していることを示していると言えよう。しかし引用(4)のようにワシが「人間の自意識のシンボルであり、進歩に対する信念であり、ワシが人間の存在理由であった」とすれば、その人間の存在理由を簡単になくすることができるのかなと私は考えたくないのであるが、ともかくこの物語はジードの精神の自由の告白として、一応結論づけたいと思う。

II

さて次に『鎖を離れたプロメテ』のもう一つのテーマである「無償の行為」が『法王庁の抜け穴』でいかに展開しているかを考えたいと思う。あらずじを簡単に述べると、「ローマ法王が監禁され幽閉されている」というデマを流す徒党——「ムカデ組——Le Mille Pattes」が、「法王救助のための十字軍」という名で、上流階級の家庭を訪問して、資金と称して金をせびり、詐欺を企てる。そしてアメデ・フリッソワール (Amédée Fleurissoire) (以下Aと略称) という男が、ローマへ行かされることになる。他方、ラフカディオ・ルーキー (Lafcadio Wluiki) (以下Lと略称) という19歳の青年が登場する。この青年はブカレスト生まれで、ジュスト・アジェノール・ド・バラリウル伯爵の私生児であるが、少し変わった人物で、ある時、火事で閉じこめられた二人の子どもを、高い建物の中から救い出したりするが、日頃は自分の意志を鍛えるために、自分の太ももに細い錐のような小刀を突き刺すという、自虐的な面を持っている。このLがイタリアで、偶然同じ列車に乗りあわせたアメデ・フリッソワールを列車から突き落としてしまう。ここで読者にとってとまどいを感じる点は、LがAを殺す理由は何一つないということである。LはAがポケットに所持していた六千フランに手も付けていなかったことから、金目当てでなかったことは明らかである。また初対面のAを憎む理由も考えられず、この殺人は「無償の行為」というかむしろ「動機のない行為」と考えられる。新庄嘉章氏の言葉を借りると、Lは「自分の魂を戦慄させる

ような、喜びを追求している」のであり、ジードはこの作品の中で、因習的な倫理を超越した、自由な行為を実験的にLに演じさせたとも考えることができる。いわばLはジードの操り人形と言えるかもしれない。しかし私の知りたく思うのは、何故ジードが「目的のない行為」という考えに熱中したかという点である。加藤周一氏はこの点に関して次のように説明している。

ジードは行為の主体の側において、目的に対する自己の態度を改める形で、問題の解決をはかろうとした。ジードの終生の問題は自我の問題であり、反省的な意識の世界から行為する主体の世界へ移るときにも、彼は問題を自我の領域で解こうとしたのであろう。そしてそれをそうする限り、他の結論がありえたとは思われない。行為の動機を自我の内側に移せば、無償の行為以外のなにを移し出すことができたろうか。……行為は改めることができないとルーキーは言う。何度でも改め、何度でも繰り返すことのできる反省を断ち切って、自我を固定させるために、改めることのできない行為が論理的に要請される。ジードはそういう論理的要請をルーキーに具体化したとも考えられよう。その場合に要請されるのは、行為そのものであって、行為の目的ではない。……そもそも「無償の行為」なるものが実際にはありえぬこと、しかもそれが自我の探求の過程に必然的な帰結だと言うことを、彼自身が知っていたからであろう。⁽⁹⁾

そういえば、ジード自身も「無償の行為」はあり得ないと言ったと言うことである。また加藤周一氏は同じ頁で、「主観的立場から出発した実存主義の哲学において、重大な問題の一つは、行為を無償性からいかに救うかという点にかかっているのである」と言っている。カミュの『異邦人』の中で、主人公ムルソーが母親と死別して一週間も経たないときに、彼の友人と敵対する男を射殺し、法廷でその動機を尋ねられたときに、「太陽のせいだ」と答えるところがある。この主人公ムルソーの答えが、私にジードの「無償の行為」を思い起こさせるのである。ジードの「無償の行為」と言う考えが数十年後

のカミュの実存主義的考えに影響を与えたのか、あるいはすでにジードの作品にその萌芽を持っていたのかどうかは、検証する価値があるように思われるのである。

注

- (1) *Oeuvres Completes d'André Gide*, Edition Augmentee de Textes Inedits Etablie par L.Martin-Chauffier (Paris, Gallimard, 1932-339) vol.3, p.105.
- (2) *Ibid.*, p. 119.
- (3) 川上徹太郎著,『西洋暮色』(河出書房新社, 昭和46年) 271頁。
- (4) A.Gide, *op.cit.*, pp.133-34.
- (5) *Ibid.*, pp.130-31.
- (6) 川上徹太郎, 前掲書, 269頁。
- (7) A.Gide, *op.cit.*, p.147.
- (8) 中村栄子著,『楽園探求』(駿河台出版社, 1995年) 234頁。
- (9) A.Gide, *op.cit.*, p.158.
- (10) 川上徹太郎, 前掲書, 271-72頁。
- (11) A.Gide, *op.cit.*, p.149.
- (12) 中村栄子, 前掲書, 233頁。
- (13) 新庄嘉章,『フランス文学辞典』, (東京堂出版, 昭和47年) pp.129-30頁。
- (14) 加藤周一,『ジード全集月報』XI, 1951.5.

(引用の訳文は川上徹太郎氏の訳を参考にさせていただいた)

(2001年4月11日 受理)